

□巻頭言□

学術論文のすすめ

国際医療福祉大学 大学院長・教授 三浦 総一郎

日本の近代化の礎の形成に大きく貢献した福沢諭吉は「学問のすすめ」の中で、「国の国際的な地位は、学問する人たちの学業の成果による」と述べており、知の力の創生こそが軍事力や経済力にも増して国の発展に重要であることを示唆しています。その状況は21世紀の今も変わりありません。むしろ、少子高齢化が進み、IT化や国際的グローバル化が急速に進行する現在の我が国において学業の成果を上げることは一層必要とされることではないかと思われます。

学業の成果を広く世間に知らしめるのが学術論文であります。学術論文 (scientific paper) は一般の書物やエッセイなどと異なり、当該専攻分野の学術水準に学問的に付加・貢献するレベルでなくてはなりませんし、ある課題に沿って論理的に構成され一定の結論を導き出した論文であり、オリジナリティを有することと、エビデンスに基づいた記述が要求されます。本学大学院の教員や大学院生は、専門領域の多くの優れた学術論文を読むとともに、その研究成果を学術論文として記す努力を惜しまないようにしていただきたいと思います。

学術論文は、主に原著論文 (original paper) と総説論文 (review) の2種類がありますが、研究計画を立てる際には、まず専攻分野の自分のテーマに関連した最近の原著論文や総説について調べ、十分な理解を得ておくことが必須となります。実際には色々な学説があり、対象や方法の違いによりその結果が異なる場合が出てくるのですが、系統的レビュー (systematic review) ではそのような疑問に答えるべく役立つでしょう。多くの優れた総説論文と、エポックメイキングな原著論文を網羅し理解することにより、自身のこれから取り組もうとする研究テーマの専門分野内での位置付けと意義が明瞭になっていくと思います。オリジナリティが十分あるか、社会へのインパクトがどのくらいあるかという点も認識できると思います。

「私は経験もないし、時間も限られている。1つの学術論文を記したぐらいで、社会に意味ある貢献ができるとは思わない」と考えている人がいたら、それは間違いです。橋本策 (はかる) 先生は、橋本病の発見者として世界的に有名ですが、彼は唯一の学術論文によって歴史上に輝き、肖像は日本甲状腺学会のロゴマークにも描かれていますのでその話を紹介したいと思います。橋本氏は1881年三重県伊賀町に生まれ、1903年に京都帝国大学福岡医科大学 (現九州大学医学部) に入学し、1908年に外科学第一講座にて三宅教授に師事しました。彼はそこで、前頸部腫脹を主訴とした中年女性4例の甲状腺組織を検索し、その組織学的特徴をとらえ、4年後の1912年に全く新しい疾病として1編の論文にまとめました。論文はドイツの臨床外科学会雑誌に「Zur Kenntniss der lymphomatösen Veränderung der Schilddrüse (Struma lymphomatosa)」(甲状腺のリンパ性腫大に関する知見 (リンパ性甲状腺腫)) として題名にラテン語での病名を付して発表されました。同年、橋本氏はドイツへ留学しましたが、1915年第一次世界大戦のため帰国、翌年郷里にて34歳で家業を継いで開業しています。開業してからは、貧富の分け隔てなく医は仁術を地でゆく施療をおこない、請われるままに野を越え山をこえ往診に赴き、病院は多忙を極めたといわれています。しかし、驚くべきことに生前には橋本病発見者の栄誉を受けることなく、1934年に52歳でひっそりと寡黙勤勉の生涯を閉じられました。

彼の執筆後、この論文はどのような運命を辿ったのでしょうか？1913～1914年のSimmondsらのドイツ語論文での本論文での引用は見られますが、敗戦国であったこともあり、学派の異なる1920年代の英米の論文では本論文は取り上げられていません。脚光を浴びたのは、英国の高名な外科医 Cecil JOLL が1939年に Brit J Surg

に「The pathology, diagnosis, and treatment of Hashimoto's disease (Struma lymphomatosa)」として橋本博士の名を記して紹介したことによるもので、それを契機として現在まで橋本病として国際的に認識されるようになりました。神は彼の真摯な努力を見捨てなかったわけではありますが、この橋本博士のエピソードから教わる教訓は大きいと思います。本論文は精緻で美しい病理のスケッチが印象的であり、そこには橋本氏の誇りと確信が感じられるものですが、ドイツ語雑誌という当時の国際雑誌に発表したこと、Struma lymphomatosa（リンパ性甲状腺腫）という、ラテン語を用いしかも誰でも納得するような魅力的な表現で病名の特徴を一言で題名に表したことが、後世の多くの人にインパクトを与えたと考えられます。

これから皆さんは自分の研究を学術論文として積極的に残していられることをお勧めしますが、その際には次世代の研究者にとって常に参照されることを意識して書き残していただきたいと願います。そのためにもできるだけ世界に通用する言語を使用して一できれば英文が良い—わかりやすい表現、心に入り込める印象的な表現を取ることをお勧めします。なんとなく皆が理解できても漠然とした概念のまま終わってしまい、それをしっかりした言葉で表現できなければ、その新規性や重要性が埋もれてしまいトレンドとはなり得ないからであります。逆に、心に伝わりやすいわかりやすい表現は、多くの人の共感を呼び起こすでしょう。もちろん、学術論文ではしっかりした構成をとっていることが要求されますし、論文の構成要素としての 1) 新規性 originality, 2) 世の中への有効性（いかに結果を社会に還元できるか）availability, 3) データや結論の信頼性 reliability や再現性が重要であるということが言われております。さらに色々な研究は実施中途からデザインに変更を加えることは、倫理的にも問題で手続きに困難を生じますので、研究計画をあらかじめ指導者あるいは研究グループ全体で、何度も吟味してディスカッションしておくことも大切かと思えます。

どうか億劫がらずに学術論文に慣れ親しんで、積極的に学術論文を書いてください。もう一度言いますが、今までに明らかにされていることを、繰り返し確認することでは論文としての価値は生まれません。どんな小さなことでも、一見くだらないと周囲に思われるようなことでも、画期的な新しいことを見出したと自分で考えれば、それは必ず学術論文にして残すべきであると思います。それは、貴方の生きた証であり、もしかしたら将来、社会に大きく貢献する偉大な発見であるのかもしれません。その論文の評価は現在の Reviewer だけでなく、むしろ将来の世の中の人々に委ねようではないですか。